

地域社会における男子のスポーツの実施状況を 規定する要因の分析

鳥取大学教育学部 福元 和行
山口大学教育学部 遠藤 勝恵

A Study on the Determinants of Males' Participations in Sports Activities in Community

Kazuyuki FUKUMOTO*, Katsue ENDO**

I 研究目的

地域スポーツの重要性が謳われ、地域スポーツ振興のための様々な方策が案出され、実行されているがいずれも地域住民の日常的スポーツ活動の促進ということを課題としている。

これまでにスポーツの実施状況を規定する要因についてはいくつかの研究^{1,2,3,4)}があり、「性」「年齢」「職業」「結婚」「生活時間」「過去のスポーツ経験」など様々な要因が指摘されているが、現在のスポーツ実施状況を規定する要因の分析では、過去のスポーツ経験は不可欠の説明変数として取り扱われており、金崎がスポーツ実施状況を規定する要因の分析の中で、分析内容である過去のスポーツ経験について、「過去のどのようなスポーツ経験が現在のスポーツ行動にどのような影響を及ぼすか、といったより詳細な分析をすすめていくことが求められる」⁵⁾と指摘しているように、社会人の場合の過去のスポーツ経験の分析は、長期間を分析対象として詳細に検討を加えていく必要がある。

本研究は地域社会での男子のスポーツ活動の実施状況を規定する要因を、特に過去のスポーツ経験及びそれに伴う認知の側面から探ることを研究目的としている。

II 研究方法

1 データの収集

本研究では山口県教育委員会が1988年12月12日から1989年1月20日にかけて郵送法により県内の56市町村から人口の比率に基づき収集したデータの中から、男子282名分を採用し分析を行った。

* Department of Physical Education, Faculty of Education, Tottori University

** Department of Physical Education, Faculty of Education, Yamaguchi University

標本の構成は表-1の通りである。

表-1 標本の構成

		N	%
1. 年齢	20才代	70	24.9
	30才代	93	33.1
	40才代	74	26.3
	50才代	28	10.0
	60才以上	16	5.7
2. 結婚	未婚	72	25.8
	既婚	202	72.4
	離死別	5	1.8
3. 末子年齢	子供いない	64	24.2
	就学前	71	26.9
	小・中学生	77	29.2
	高・大学生	26	9.8
	就職	26	9.8
4. 職業	農林漁業	10	3.7
	商業	26	9.6
	事務職	90	33.2
	専門管理職	17	6.3
	土木・建設	25	9.2
	公務員	16	5.7
	無職・その他	87	32.1
5. 居住地区	商業地区	16	5.8
	工業地区	6	2.2
	住宅地区	115	41.8
	農山漁村地区	138	50.2
6. 通勤時間	15分未満	127	45.7
	15分以上30分未満	61	21.9
	30分以上	58	20.9
	通勤していない	32	11.5
7. 平日の自由時間	3時間未満	135	48.4
	3時間以上4時間未満	82	29.4
	4時間以上5時間未満	36	12.9
	5時間以上	26	9.3
8. 休日の自由時間	4時間未満	57	20.4
	4時間以上7時間未満	78	27.9
	7時間以上10時間未満	70	25.0
	10時間以上	75	26.8

調査内容は山口県教育委員会が実施した「山口県民のスポーツに関する調査」の調査内容の中から個人的属性に関して9項目、スポーツ経験に関して40項目など合計76項目を採用し、分析の対象とした。なお、外的基準であるスポーツの実施状況を測定するための調査項目の内容は、2週間以内に自由時間を見つけて何かのスポーツを実施するだろう、である。また、スポーツ経験についての調査内容は小学校時代より現在までを調査対象期間とした。

2 データの分析

自由時間におけるスポーツの実施状況と各変数との関係を探るため χ^2 値を求めたが、有意差の見られる 2×3 以上の分割表を使用した変数については、残差分析を行った。

また、林の数量化理論Ⅱ類の適用に際しては、前記調査内容に対する肯定群と否定群に分類し外的基準とした。

スポーツ経験については「非常にあてはまる」から「まったくあてはまらない」までのリッカート尺度の4段階評定を「あてはまる」「あてはまらない」の2段階評定に統合し直し、解析した。解析の条件は、 $T=2$ (スポーツ実施群124名、非実施群60名)、アイテム数42、カテゴリー総数104である。

Ⅲ 結果および考察

1 外的基準と説明変数のクロス集計結果

1) 個人的属性

表2は外的基準(現在のスポーツの実施状況)と年齢の関連を見ようとしたものである。 χ^2 検定の結果、年齢別のスポーツ実施状況に差が見られたため、残差分析を行った結果、40才代で1%水準の有意差が表れており、年齢の若い人にスポーツ実施者が多いことがわかる。

表-2 外的基準と年齢のクロス集計結果

	I	II	III	IV	V
スポーツを実施	72.3	71.2	74.5	29.4	53.8
スポーツを非実施	27.7	28.8	25.5	70.6	46.2
	(N=47)	(N=59)	(N=47)	(N=17)	(N=13)
I: 20才代	II: 30才代	III: 40才代	χ^2 値=14.183	**<.01	
IV: 50才代	V: 60才以上				

表3は外的基準と結婚の関連を見ようとしたものであるが、有意差が見られるため残差分析を行った結果、自由時間にスポーツを実施するとする人は未婚(1%水準)、既婚(5%水準)に多く、離死別では少なく(10%水準)になっており、結婚に関連した変数間にスポーツ実施状況に関して差異が見られる。

表-3 外的基準と結婚のクロス集計結果

	I	II	III
スポーツを実施	85.4	62.8	25.0
スポーツを非実施	14.6	37.2	75.0
	(N=41)	(N=137)	(N=4)
I:未婚 II:既婚 III:離死別			χ^2 値=10.558 **<.01

表4は外的基準と末子年齢の関連を見ようとしたものである。有意差が認められたため残差分析を行った結果、末子が小・中学生であるとする父親に有意差（5%水準）が確認され、末子年齢が中学生以下の父親ではスポーツ実施者が多いことがわかるが、一方、末子年齢が高校生以上では高・大学生、就職のそれぞれに5%水準で有意差が認められており、高校生以上の子供を持つ父親にはスポーツを行う人が少ないと言える。

表-4 外的基準と末子年齢のクロス集計結果

	I	II	III	IV	V
スポーツを実施	75.6	63.8	78.7	47.6	44.4
スポーツを非実施	24.4	36.2	21.3	52.4	55.6
	(N=41)	(N=47)	(N=47)	(N=21)	(N=18)
I:子供なし II:就学前 III:小・中学生 IV:高・大学生 V:就職					χ^2 値=12.149 *<.05

表5は外的基準と通勤時間の関連を見ようとしたものである。有意差が認められたため、残差分析を行った結果、通勤時間15分以内（5%水準）、通勤していない（1%水準）に有意差が認められたため、通勤時間の短い人にスポーツ実施者が多いと考えられるが、通勤していない人にスポーツ実施者が少ないという点の解釈については、今後の課題としたい。

表-5 外的基準と通勤時間のクロス集計結果

	I	II	III	IV
スポーツを実施	75.3	66.7	68.4	38.1
スポーツを非実施	24.7	33.3	31.6	61.9
	(N=85)	(N=36)	(N=38)	(N=21)
I:15分未満 II:15分以上30分未満 III:30分以上 IV:通勤していない			χ^2 値=10.698 *<.05	

表6は外的基準と平日の自由時間の関連を見ようとしたものである。有意差が認められたため、残差分析を行った結果、4時間以上5時間未満（5%水準）、5時間以上（1%水準）に有意差が

認められたため、平日の自由時間が長い人にスポーツ実施者が多いと理解してよいと考えるが、5時間以上の自由時間の人にスポーツ実施者が少ない理由の検討は、今後の課題としたい

表-6 外的基準と平日の自由時間のクロス集計結果

	I	II	III	IV
スポーツ・クラブに参加	66.3	70.2	85.0	41.2
スポーツ・クラブに不参加	33.7	29.8	15.0	58.8
	(N=89)	(N=57)	(N=20)	(N=17)
I : 3時間未満	II : 3時間以上4時間未満	χ^2 値=8.362	* < .05	
III : 4時間以上5時間未満	IV : 5時間以上			

2) スポーツ経験

① 小・中学時代のスポーツ経験

小学時代のスポーツ経験と外的基準との関連を見ようとしたのが表-7である。3変数に有意差が認められたが、「運動クラブに所属したことがある」「休日などに自由に運動した」「スポーツ経験は充実していた」の各設問に対する肯定群では否定群と比較して、スポーツの実施者が多く見られる。

表-7 外的基準と小学校時代のスポーツ経験関連変数のクロス集計結果

要 因	説 明 変 数	クロス集計	
		χ^2 値	P
小学校時代の スポーツ経験	運動クラブに所属した	15.093	***
	休日などに自由に運動した	5.708	*
	充実していた	4.385	*
		* < .05	*** < .001

中学時代のスポーツ経験と外的基準の関連を見ようとしたのが表-8である。運動クラブに所属していたとする人に、スポーツの実施者が多く見られる。

表-8 外的基準と中学校時代のスポーツ経験関連変数のクロス集計結果

要 因	説 明 変 数	クロス集計	
		χ^2 値	P
中学時代のスポーツ経験	運動クラブに所属した	5.158	*
		* < .05	

② 高校時代のスポーツ経験

高校時代のスポーツ経験と外的基準との関係を見ようとしたのが表-9である。4変数に有意差が認められたが、「運動クラブに所属したことがある」「地域のスポーツ大会によく参加した」「スポーツは楽しかった」「スポーツ経験は充実していた」「スポーツは健康に役立った」「スポーツは仲間づくりに役だった」「スポーツにはよい思い出がある」の各設問に対する肯定群では否定群と比較して、スポーツの実施者が多く見られる。

表-9 外的基準と高校時代のスポーツ経験関連変数のクロス集計結果

要 因	説 明 変 数	クロス集計	
		χ^2 値	P
高校時代のスポーツ経験	運動クラブに所属した	6. 5 0 1	*
	充実していた	9. 2 2 4	**
	健康に役だった	8. 7 3 8	**
	よい思い出がある	8. 2 6 1	**

* < . 0 5 ** < . 0 1

③ 19才～22才のスポーツ経験

表-10は19才～22才のスポーツ経験と外的基準の関連を見ようとしたものである。「スポーツ・クラブに所属したことがある」「休日などに家族や仲間などと少人数で自由に運動した」「スポーツは楽しかった」「スポーツは健康に役だった」「スポーツにはよい思い出がある」の各設問に対する肯定群では否定群と比較して、スポーツの実施者が多く見られる。

表-10 外的基準と19才～22才のスポーツ経験関連変数のクロス集計結果

要 因	説 明 変 数	クロス集計	
		χ^2 値	P
19才～22才の スポーツ経験	スポーツ・クラブに所属した	14. 4 0 3	***
	休日などに自由に運動した	4. 7 4 0	*
	楽しかった	10. 1 4 5	**
	健康に役だった	14. 8 6 8	***
	よい思い出がある	9. 0 7 1	**

* < . 0 5 ** < . 0 1 *** < . 0 0 1

④ 23才以降のスポーツ経験

表-11は23才以降のスポーツ経験と外的基準の関連を見ようとしたものである。「スポーツ・クラブに所属したことがある」「休日などに家族や仲間などと少人数で自由に運動した」「地域のスポーツ大会によく参加した」「スポーツは楽しかった」「スポーツ経験は充実していた」「スポーツは健康に役だった」「スポーツは仲間づくりに役だった」「スポーツにはよい思い出がある」の各設問に対する肯定群では否定群と比較して、スポーツの実施者が多く見られる。

表-11 外的基準と23才以降のスポーツ経験関連変数のクロス集計結果

要 因	説 明 変 数	クロス集計	
		χ^2 値	P
23才以降の	スポーツ・クラブに所属した	22.012	***
	休日などに自由に運動した	18.283	***
	地域のスポーツ大会に参加した	17.341	***
スポーツ経験	楽しかった	28.179	***
	充実していた	28.824	***
	健康に役だった	30.404	***
	仲間づくりに役だった	19.686	***
	よい思い出がある	15.952	***

*** < .001

外的基準と個人的属性及びスポーツ経験に関連する変数の関連を探ったが、個人的属性に関して5変数に有意差が確認された。また、スポーツ経験に関しては小学時代3変数、中学時代で1変数、高校時代で4変数、19才～22才で5変数、23才以降で8変数の合計21変数に、また全体では26変数に有意差が認められた。このことは地域のスポーツ・クラブへの参加状況との関連で有意差の見られた変数が、女子では11変数でスポーツ経験は19才以降のスポーツ経験に限定されていたこと、また男子では27変数で中学時代以降のスポーツ経験に限定されていたことを考慮すると、スポーツ活動の実施状況に影響する要因はスポーツ・クラブ参加状況を規定する要因よりも幅が広く、小学時代のスポーツ経験まで含むことを示唆していると考えられる。

要因分析の結果

1) スポーツ活動の実施状況の規定要因

表-12はスポーツ活動の実施状況の規定要因の分析結果である。 η^2 値は0.503であった。レンジを手がかりに考察を行うが、各要因の規定力の大きさは「年齢」「結婚」「居住地区」「通勤時間」「職業」「平日の自由時間」「末子年齢」「小学時代に運動クラブに所属した」「高校時代のスポーツ経験にはいい思い出がある」「23才以降のスポーツ経験は仲間づくりに役だった」という順序になっている。

上位10アイテムの内訳は個人的属性に関連するアイテム7、小学時代のスポーツ経験に関連したアイテム1、高校時代のスポーツ経験に関連したアイテム1、23才以降のスポーツ経験に関連したアイテム1となっており、個人的属性に関するアイテムが過半数を占めているが、スポーツ活動の実施状況を規定する有力な要因となっている。

スポーツ経験に関連したアイテムでは高校時代及び23才以降のスポーツ経験に関連した認知関連要因が2アイテム見られる。

2) カテゴリー・スコアと寄与の方向

カテゴリー・スコアは各カテゴリーが外的基準のどの方向にどれだけの強さで影響を与えているかを見ることを可能にするものであり、本研究では、カテゴリー・スコアが正の符号の場合スポー

表-12 要因分析の結果

アイテム	レンジ	順位	カテゴリー	カテゴリー・スコア	偏相関	順位
年令	1. 376	1	20才代	-. 318	. 282	2
			30才代	. 201		
			40才代	. 136		
			50才代	-. 727		
			60才以上	. 649		
結婚	1. 344	2	未婚	. 760	. 320	1
			既婚	-. 202		
			離死別	-. 584		
居住地区	1. 108	3	商業地区	. 228	. 143	8
			工業地区	-. 880		
			住宅地区	-. 038		
			農山漁村地区	. 048		
通勤時間	1. 030	4	15分未満	. 232	. 259	3
			15分以上30分未満	-. 126		
			30分以上	. 125		
			通勤していない	-. 798		
職業	0. 939	5	農林漁業	-. 254	. 190	5
			商業	-. 126		
			事務職	. 154		
			専門管理職	. 564		
			土木・建設	-. 375		
			公務員	-. 251		
			無職・その他	-. 058		
平日の自由時間	. 761	6	3時間未満	-. 083	. 175	7
			3時間以上4時間未満	. 179		
			4時間以上5時間未満	. 285		
			5時間以上	-. 476		
末子年令	. 686	7	子供なし	-. 279	. 180	6
			就学前	-. 196		
			小・中学生	. 156		
			高・大学生	. 091		
			就職	. 407		
小学時代に運動クラブに所属した	. 684	8	所属した	. 205	. 238	4
			所属しなかった	-. 298		
高校時代のスポーツ経験にはいい思い出がある	. 503	9	有る	. 205	. 116	10
			無い	-. 298		
23才以降のスポーツ経験は仲間づくりに役だった	. 461	10	役だった	. 158	. 112	
			役立たない	-. 303		
休日の自由時間					. 134	9

(注) 順位はすべての要因(48アイテム)中の順位であるが、11位以下は省略した。(η² = 0. 503)

ツ活動を実施している、という方向に寄与し、負の場合実施していない、という方向に寄与することになるが、カテゴリー及びカテゴリー・スコアは表-12の通りである。

上位10アイテムの中には「年令」「結婚」「居住地区」「通勤時間」「職業」「平日の自由時間」「末子年令」という個人的属性に関連した7個のアイテムが見られるが、男子のスポーツ・クラブへの

参加の規定要因^{註1)}の中には見られなかったアイテムである「年令」「通勤時間」が入っており、スポーツ・クラブへの参加を規定する要因に較べて個人的属性の影響が強いと考えられる。しかし、「年令」及び「通勤時間」は規定要因の上位に位置することは理解できるが、カテゴリー・スコアに基づき寄与の方向の判断では明確な傾向は見いだせなかった。

スポーツ・クラブへの参加の規定要因と同一のアイテムでは、「結婚」で未婚に実施の方向、既婚・離死別で非実施の方向が見られるが、この結果はスポーツ・クラブへの参加の規定要因の中で見られた未婚が不参加の方向、既婚・離死別が参加の方向という結果といわば逆の傾向を示している。また「末子年令」では子供なし・就学前で非実施の方向、小・中学生以上で実施の方向が見られるが、スポーツ・クラブへの参加の規定要因の中では、子供なし・就学前が参加の方向、小学生～大学生が不参加の方向を示しており逆の結果となっている。「居住地区」では商業地区が実施の方向を示し、スポーツクラブへの参加の規定要因と同様の結果となっている。ところで、スポーツ実施に消極的であると言われてきた農山漁村地区で実施の方向が見られ、スポーツ・クラブへの参加の規定要因と異なった結果を示している。

スポーツ経験に関連したアイテムで上位10位以内に入っているのは3個であり、数の上からも順位の上からも規定要因の中での影響力はスポーツ・クラブの場合と比較して弱いと言わざるを得ない。

IV 要 約

本研究は地域社会における男子のスポーツ活動の実施を規定する要因を探ることを目的とするものであったが、結果を要約すると以下ようになる。

1. スポーツ活動の実施状況と説明変数との関係を探るため、 χ^2 値を求めたが、26の変数に有意差が認められた。

内訳は、個人的属性に関連して年令、結婚、末子年令、通勤時間、平日の自由時間の5変数に有意差が認められた。また、スポーツ経験では、小学時代のスポーツ経験に関連して3変数に、中学時代のスポーツ経験に関連して1変数に、そして高校時代のスポーツ経験に関連して4変数に有意差が認められた。また、19才～22才のスポーツ経験に関連して5変数、23才以降のスポーツ経験に関連して8変数に有意差が認められた。

2. 林の数量化理論Ⅱ類により、スポーツ活動の実施状況の規定要因を探ろうとして、カテゴリー数量のレンジによる考察を行ったが、上位10アイテムの内訳は個人的属性に関連したアイテム7、スポーツ経験に関連したアイテム3となっており、個人的属性に関連したアイテムが過半数を占め、大きな影響力を示している。

個人的属性に関連した7アイテムの中の、「結婚」「居住地区」「職業」「平日の自由時間」「末子年令」はスポーツ・クラブへの参加を規定する要因の中にも見られたアイテムであるが、残りの「年令」「通勤時間」のアイテムは独自のアイテムであり、アイテムの数量及び順位の上からスポーツ活動には個人的属性が強く影響していると考えられる。

スポーツ・クラブへの参加の規定要因と同一のアイテムの中で、「結婚」「末子年令」「居住地区」の各カテゴリー・スコアは、スポーツ・クラブへの参加状況の規定要因の中で見せた寄与の方向とは異なった結果を見せた。

スポーツ経験に関連したアイテムは上位10位以内での数量及び順位から、スポーツ活動に対する

影響力は小さいと言える。

本研究はスポーツ活動の実施状況を規定する要因を、過去のスポーツ経験及びそれに伴う認知の側面から分析しようとした。そのため、被調査者の回想を手がかりとしているが、正確なデータを得にくいという弱点を持っている。したがって、より正確なデータを取得するための研究方法の検討を今後の課題としたい。

本研究では山口県教育委員会の御理解を得て、調査データを使用させて頂いた。ここに記して謝意を表する次第である。

注

注1) 考察の中で使用した男子の分析結果はこの論文の中より引用したが、表の掲載については再掲載になるため見合わせた⁶⁾。また、女子の分析結果についても同様である⁷⁾。

引用・参考文献

- 1) 金崎良三：「スポーツ行動の予測と診断」, 徳永幹雄他著『現代スポーツの社会心理』, 遊戯社, 1985, PP. 51～60
- 2) 嘉戸 脩他：「直接的スポーツ関与の分析とその要因に関する研究」, 体育社会学研究会編, 『体育社会学研究 6 スポーツ参与の社会学』, 道和書院, 1977, P. 49
- 3) 江刺正吾：『女性スポーツの社会学』, 不昧堂出版, 1992, PP. 269～279
- 4) 江刺正吾：『学生の生活とスポーツ』, 道和書院, 1980, PP. 155～190
- 5) 前掲書 1. P. 56
- 6) 福元和行・遠藤勝恵：「地域スポーツ・クラブへの男子の参加を規定する要因の分析」, 鳥取大学教育学部研究報告, 第37巻 2号, 1995年12月発行予定
- 7) 福元和行・遠藤勝恵：「地域スポーツ・クラブへの女子の参加を規定する要因の分析」, 山陰体育学研究, 第10号, 1995, PP. 30～35
- 8) 中村平：「運動者と運動者行動」, 宇土正彦他著, 『体育経営管理学講義』, 大修館書店, 1989
- 9) 山田文康：「試験問題の難易度を予測する」, 渡部洋編著『心理・教育のための多変量解析法入門—事例編—』, 福村出版, 1991, P. 125
- 10) 金崎良三他：「スポーツ行動の予測因に関する研究(1)」, 健康科学, 第3巻, 1981
- 11) 多々納秀雄他：「スポーツ参加の多変量解析(1)」, 健康科学, 1980
- 12) 山田文康：「数量化 I・II類」, 渡部洋編著『心理・教育のための多変量解析法入門—基礎編—』, 福村出版, 1991
- 13) 宇土正彦：『体育管理学』, 大修館書店, 1983
- 14) 嘉戸 脩：「運動クラブの運動欲求変容機能に関する一考察」, 体育社会学研究会編, 『体育社会学研究 3 体育とスポーツ集団の社会学』, 道和書院, 1974